

愛の血液運動月間

7月は愛の血液運動月間



献血は愛の奉仕活動

新津市長 斎藤 富雄

七月は「愛の血液助け合い運動月間」でした。当市でも、この「血液の助け合い」に多くの方から協力をいただきました。ここに、紙面を借りて厚くお礼を申し上げます。

私たちの体は、血液がなければ、その生命を維持することができません。ところが、科学がこんなに進歩した今日でも、血液を人々の手につくりますことはできないのです。手術や治療に欠かせない輸血用血液のすべては、献血に頼

らなければなりません。

献血は、健康な人ならだれでもできる「愛の奉仕活動」の血液を確保するだけでなく、献血される方の健康管理にも大いに役立っています。幸い、当市では昨年の十一月に、新津市献血事業推進協議会が発足しました。協議会の皆さんを中心に、崇高な使命を持つ献血事業が、さらに大きく広がることが強く念願しています。



献血ということに寄せて

新津保健所長 野村 裕子

血が通う、という言葉がある。血も涙もない、という言葉もある。いずれも血というものの温かみを知っている上での言葉である。生きる者にとって血の一滴がどんなに大切なものであるか、古来誰にも理解されていたと思う。

しかし血液は、正常な人であれば誰でも自力で再生産され得るものでもある。正しい量の範囲であれば採血はマイ

ナスではない。検査のための採血量程度で悲鳴をあげる必要は勿論ない。

災いを共有することによって犠牲を最少限にしようという考え方が現代人の一つの知恵だと思ふ。近年医療が格段の飛躍を遂げた中で、外科もその手術成績を大きく伸ばしたのには、麻酔学や技術の進歩の支えがあるが、その陰に輸血用血液が充分に準備される



献血にご協力に感謝

新津市献血事業推進協議会長 夏井 清次

時代に入ってきた事実を見逃すことができない。手術台上での死亡に絡む数多くの口惜しさを減らしたためである。保存血、新鮮血、或いは全血、成分輸血という風に、その目的に応じてこれが心配なく用意されるということは、ひとり医療関係者のみならず、どんな災いに遭うか知れない現代に生きる身の、一人々々に

とって有難いことに違いない。しかし、血液は天から降ってくるものでもないし、誰かがどこかの棚からばたけ式に受け取る様なものでもない。やはり私達が私達のために私達によって用意しなければならないものである。

永年本市の献血成績不振の現状を黙視できず、昨年十一月、十五団体、四〇名で「献血事業推進協議会」を設立致しました。

幸い皆様のご協力を頂き、初年度で早くも目標達成ができましたことを心から感謝申し上げております。

本年度は、全町内部落から会員の加入を頂き、先ず献血の意義・趣旨の普及に力を注ぐことと致しております。

皆様の一層のご協力をお願い申し上げます。



献血の体験から

高校生 小林 恵

私は、先月病気にかかり、手術を受けました。出血の為に輸血を受けたのですが、出血量は約一リットル程だったと後で聞きました。

「体重×三分の一」が、その人の全血液量である、と聞いたことがあります。私の場合、もう二三百リットル

勉強を始めました。薬を飲めば献血できなくな。又一生薬を続けねばなら。ない等と聞かされ、薬は最後の手段として先ず食事では塩分を減らし、適量の食物を分類してお膳手に表示し、特に精神安定に留意するよう努力しました。

献血の際、血液の生化学的検査も併せて実施してもらえますが、私は二〇回のデータの検査の中で、特にコレステロール値を重視、一時は二四〇もありましたが、努力の結果三月には二二〇に下がりました。私の健康法に救えられた。

来年までには是非五〇回を達成したい。そして年齢制限（六十五才）で献血できなくなつても、この貴重な教訓が生かされてゆきたいものと考えております。